
V S ・ G A M E 『バーサスゲーム』

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

V S ・ G A M E 『バーサスゲーム』

【Nコード】

N 3 6 3 9 Z

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

エイリアンの侵略により、世界は混沌としていた。それに、普通の人間は気づかず、平和に過ごし、少しずつ、奴らに生活の全てをコントロールされていく。

しかし、そのエイリアンの弱点は格闘ゲームだった。彼らは戦闘種族であるがゆえに、格闘ゲームにもものすごく嵌る。そのせいで、格闘ゲームで負けると死ぬという、禁断の文化が発祥し、エイリアンは、楽しみに暮らしていた。その弱点を利用するため、政府は格闘ゲームの天才達を集めることに。

―【少女と先生】―（前書き）

前に中途半端に書いた、小説の改稿版です。

―【少女と先生】―

雑踏を動かす一つの権力者がそこにはいた。ずっと、歩いて一つの目的地へと向かっている。

無数に通り過ぎる、人々は何を考えているのか。

そして、今見上げた太陽には何が隠されているのか。

きつと、それは誰も知らない。

ハチは、ふと気づくことがあった。一瞬だけ、周りにいる人間が全員、怪物に見えた。ハチは、錯覚か何かだと思ったが、それが予兆だった。

世界を揺るがす、大悪夢の。

そんなことがあったので、じっくり目を擦ってみると、どうやら元の普通な人間達だった。

ハチは、仕方が無いので、時計を確認する。

「しまった、時間がない」

全力で、約束のゲームセンターに向かうハチ。今日は、格闘ゲームの大会があるのだ。

その格闘ゲームには大まかに三つ種類があるのだが、エキストリームファイトをハチは好んでしている。エキストリームファイトの一番の特徴は、技がなかなか決まらないことである。ガード力がすさまじいのだ。ゆえに、多くの人は犬猿する。勝負がつかないとされるからだ。

だが、ハチにとってそれは単なる遊戯だった。

息切れ切れになって、ようやく会場に到達した。

そこには、多くの人たちが、コントローラー片手に、暗闇の中画面をのぞいていた。

ハチは、とりあえず受付を済ませると、コーラを買おうと、外に出た。

その時、一人の少女が彼を見ていた。

「あの…」コーラを注文しているハチに話しかける、少女。

「何？」

ハチは、緊張してぶつきらばうに言い返す。

「あのね。良かったら、私に格闘ゲームの何たるかを教えてくれな
い？」

「君…、格闘ゲームファン？　いまや、格闘ゲームは影のブーム。
君も大会に出るのかい？」

「いいえ、私は超下手っぴ！　」自慢げに言う、少女。

「名前は？」

少女は、黒髪にリボンをつけていた。割と清楚だ。

「黒田みちる、です。ご指導お願いします」

ハチは、ゲーマーとして思ったのが、その少女がかなりホンモノ
の格闘を極めているようであるということ。が、本質的に違うもの
なのでなんともいえない。

才能があるかもしれないので、一つ腕試しをしてみようと思う。

「じゃあさ。『相手が、二回連続でパンチかキックをしました
両方ともヒット。あなたはどうやって回避しますか』」

みちるは、にっこり笑って答える。

「もちろん、こちらもパンチをするんだよね」

「そう、ここで逃げるのは、駄目だ。相手の実力が高いときは、ぶ
つかっていくことで、相手をひるませる。しかし、それは不完全な
答えだ」

みちるは、不思議そうな顔をする。

「一つ言っておくが、技には弱点がある。技の弱点を突くことをし
なければ、そのパンチは決まらない。そんな風にやっていると、一
つ一つの動作に対する対処が見えてくる」

以上。

ということで、授業終了。

「どうだ？　少しは分かっただろ？」

「うん。師匠、ありがと」

その時、ハチは持っていたコーラを、その少女に渡す。

「がんばれ」

そうして、ハチは大会へと向かったのだった。

廊下を、歩いて、会場の扉を開け、席に座った。

「僕が、コントローラーを持ったときから勝負が決している」

敵は鋭い目でこちらを見てくるが、所詮ハチの敵ではなかった。

彼は、いずれ、レベル ∞ と呼ばれる存在になる。そのことは、まだ誰も予想すらしていない。

僕は、大会に優勝し、帰宅するところだった。そのため、エレベーターに乗っていた。ここからは町が見える。ガラス張りだからだ。こんなときふと、思い出してしまふ。一年前の世界中の大停電を。一ヶ月も夜が真っ暗だった。

その時、人類は夜の本当の姿を知らなかったことが浮き彫りになった。夜とは、何があっても可笑しくない最悪な時間なのだと。もしかしたら、本当に何かが起こっていたって可笑しくない。

誰も。

誰も。

誰も。

もう、恐れてはいないだろう。しかし、僕にはどうしてもふに落ちなかった。何故だろう、あれからどこにいても恐怖ばかり感じる。これは、一体。

僕は、そんなことを考えていながら、エレベーターを降りようとした、その時、エレベーターの出口の正面に謎の黒服の男が居た。
「私はエイリアンだ」

僕は、額にこぼれる汗、激しい動揺を感じていた。

しかし、なんとなくコイツはエイリアンではない気がした。エイリアンは、そもそも名乗るだろうか。

「あんた、うそついてるアル」

僕は、冗談で切り抜けようとした。

「ふっははっはは」

笑う、エイリアン。いや、エイリアンはそんな楽しげに笑わないぞ。

「すまんすまん。ジョークだ。実はだ、我々のプロジェクトに協力してほしいんだよ。裏世界では、有名なレベル∞君」

「やっぱり、人間だったか」

「その通りだよ。でも、これは単なるジョークではない。腕試しというものだ。お前は、動揺しながらも、ジョークを言った。凄い洞察力だよ」

「あー」

僕は、ふと話題に困った。

コイツに何を話しても、笑われそうな気がした。

なので、沈黙する。

「どうした？」

「…」

沈黙。

「この世界は…、実に普通だ。何も起こらない。人は、もう誰も苦しんでいない。なーんて、思っている人間は世界一愚かだ。お前が見ている視野なんて、小さなものだ。いや、大きすぎてもいる。視野は狭く、おおきすぎて細かく観れない。全くバカだよ、そういう人間は。しかし、君はそうは思っていない。違うか？」

「何が言いたい？」

「君を、凄いやつが持つものとして勧誘したいのさ」

僕は、カバンから、大会の優勝賞を見せた。

「コレに関係しているな？」

「ふっははっはは」

また、笑いやがった。

むかつくなあ。

「お見通しと言うわけか。君を、狙っていたのは事実だが、まさか優勝するとは思っていなかったよ。だって、お前…実績が少ないから」

「まあ、大会に出るのは滅多に無いけど。ここ数年は、地道に練習していたんだ。裏世界でね」

裏世界について説明すると、一部の人たち（格闘ゲーマー）だけが参加できる特殊回線があり、そこは最上級の人間たちが集まるゲーム世界なのだ。

「うーん、あの回線はちょっと入ると、逆ハッキングされるから、困ったよ」

実は、そのシステムを作ったのも、僕だ。

割と簡単に作ったことを記憶している。

まあ、それくらいのことではできる。

「君が、格闘ゲームで優勝したことは大いに関係している。この世界には凶悪な怪物が存在している。それらは、人類を今、貪り食っている。あらゆる人が、もう洗脳されかけている。君も同様だ」

洗脳されている？

僕が？

謎の黒服の男は、鏡を取り出した。

「この中に、この鏡面世界に今…エイリアンが住み着いているのだ。信じられないだろうがな」

「はあ？ お前、それってどういうことだ」

「人間に観られたくない、エイリアンは、鏡の世界を牛耳り、いずれ…本物の世界を喰う」

鏡を、僕はふと見た。

すると、映っていたのは、僕じゃなかった。

「怪物…」

僕は、怖気づいて、後ろに倒れた。

「ようこそ、我々のプロジェクトへ」黒服の男は、不気味な顔でそう言った。

殴られて、何時間か過ぎた頃、気がつけば、僕は謎の閉鎖的施設にいた。

頭を抑えて、痛みを和らげていると、そこには見慣れた仲間が居た。

物は何も無い部屋だが、人は居た。

「おい、お前、ラッキーセブンのセブンじゃん？」

「あつ、レベル∞のハチ？ 久しぶり」

実は、セブン（シチ）とはゲーム中まで小さい頃は、よく戦って勝ったり負けたりしていた。

お互い、かなり強くなったので、次にあつたときは決着を付けるという理由で、お互いにお互いを卒業したのだった。

そして、これが久しぶりの再開だった。

このイカレタ、白い施設で、僕達はこれからエイリアンと戦うことになる。ただし、ゲームで。

そのエイリアンは、知的戦闘種族らしい。

―【少女と先生】―（後書き）

あとながきなんて、書くもんか。

一回戦（前書き）

格闘物語は、ついに動き出す。

一回戦

「汝、ゲーマーとして問うのであるが、どの程度のものかね？」

彼は、悠然にもラッキーセブンのシチにそう語り始めた。

のんきに、王様の椅子に座っているハチは、何処となく本調子が出てきたような感じだ。

それもそうだ、運任せながら全てを凌駕する宿命の相棒との再会があつたのだから。

「あの…、それは実際に勝負したほうが早いぜ。実はこの部屋…」

「分かつてるよ。世界中の格闘シュミレーションゲームが、勢ぞろいなんだろう？ 俺でも持つてないのもあるな…」

ハチは、両手でコントローラーを、回転させながら、考える。

ここまで、用意周到なのは、ゲーマーに用があるからだというのが明確だ。だが、何が目的でゲーマーによるのがあるのだろう。それは、レベル ∞ として考えればすぐ分かるはずだ。

『鏡面の世界のエイリアン』、それがキーワードだな。

「シチ！ お前、何か知ってるんだろ？」

「ああ、当然な。でも教えられないな、秘密だ」

ところで、シチはずっと片思いでずっと告白できずにいる童貞野郎であることは、もう笑っちゃうとこなんだけど。まあ、こいつもプライドって言うのがあるって、ハチは考えた。

そこから、いろいろ状況を踏まえていくと、シチ以外の奴らにもそれが聞こえる大きさで言つと、どうなるのかな？

「あのさ、シチは、ずっと彼女ができないし、告白もできない…どうつ」口を押さえる、シチ。

彼の黒髪のに、真紅の瞳が見えた。

その時、ハチはシチに思いつきりぶん殴られた。

「いてー、最低な奴だな。人を殴るなんて」

「こっちのセリフだ。秘密を人に思いつきり大きな声でばらしやが

って。俺の面子をどうしてくれる！」

「面子なんて気にするな！ あほー」

「（キレた）」

そうすると、シチは、格闘ゲーム『LOO・JUST・ANET』を取り出した。この部屋にあったものだが、超レアな限定版であったが：今はそれどころではない。

ゲームっていうのは、売られた勝負は買うものだ。

そう思い、ハチは、コントローラーを、シチに向けて掲げる。

「俺は、レベル∞だ！」

五分後、準備OK。でかいスクリーンが、登場。大画面の、超迫力。

このゲームは、随分前のもので、確か2030年発売元であるバコンナが二つのゲームを融合して一つの型に収めた究極のゲームといわれている。

まあ、このゲームは二人でよくやったのだが。きっと、シチも分かっている。

『このゲームでもっとも大切なのが、一瞬でも攻撃の隙を与えないこと。そうしないと一気に決められる。それに、シチは運任せの連続技がめちゃくちゃ強い。だが……』

二人は、同時にキャラを選択し、ゲームスタート。

ハチは、美男子戦士を選んだ。

シチは、多重人格戦士を選んだ。

勝負は真剣だった。

気がつけば、ギャラリーが居た。

美男子戦士は、高速で動き、多重人格戦士を惑わしている。

多重人格戦士が、攻撃に回った。

『見えた』

高速で動き、攻撃に転じようとした多重人格戦士の、背後へ行った美男子戦士。

『このキャラ特有の、スピード。それを生かしていけば、一気に勝てる。また、このフィールドの特徴である壁の存在、そこならもう逃げ場も無い』

美男子戦士は、連続技をして、さらに最大必殺技である、ソルドクラッシュを決めた。

「勝負は、ソッコー。にひひひ」

大笑いする、レベル[∞]。

「くそっ、もう一回・今は絶対マグレだ！」

「いいけどよー。勝つのは俺だからね」

ハチこと、レベル[∞]は、後ろに倒れて深呼吸して思う。格闘ゲームは、凄く充実する。こんなに楽しいものはない。何より、戦った仲間とのコミュニケーション。これは、何者にも変えられない絆だ。こんな幸せになれる、格闘ゲームが自分は大好きだ。

しかし、そんなことを思っていると、次のゲームをする暇もなく、部屋の扉から例の男が入ってきたのだった。

「いやいや、見事だったよ」黒服の偽エイリアンだ。こいつなんかむかつくんだよな。第一印象悪し。

「って、お前……」彼はいろいろ言ってやろうと思ったが、後ろを見ると。

じーっと、その偽エイリアンを尊敬するまなざしを感じた。

どういうことだ？

「凄いんだぜ。ハチ」

「何が？」

「えっ？ しらねーの。三十年前に居た天才格闘ゲームー佐々木龍之介の息子佐々木龍神だぞ」

「佐々木龍神？ アイツが？」

「遺伝だよ、遺伝。今では、影の影の影の世界の格闘ゲームの天才だ。影にしようとするところもそっくりだぜ」

彼は、思い出した。佐々木龍之介は、死んでから有名になったゲームーだったと。

「雑談はその辺にしたまえ」龍神、いや黒服の偽エイリアンでいい。奴は、また高らかに笑った。そして…。「君たちに、始めの鏡試練を与える。エイリアンの名は、ギガンテス。割と簡単に倒せると思うぞ」

エイリアン【ギガンテス】だと。

なんか凄く強そうだ。

本当に強いなら、早く勝負したいが…。負けたら死ぬんじゃない…（汗）。

「おいおい、お前達はプレイしない。安心しろ。お前達は、奴隷を操るんだよ」

「奴隷？」一同は疑問に思う。

「お前達を信頼する、雑用だ。お前達は、その奴隷に指示を与え、勝ちへと導く。ちょっと、難しいけど。私がやったところ上手く行った実例は多いぞ」

「ふーん、面白い」そう、はっきり言うハチ。「このゲーム、本当はかなり難しい。みんな、気をつける」

もう、後には引けない。

それにしても、家で帰りを待っている、両親はどうなったんだろう。勝てたらメールをしよう。きっと、事情を説明すれば分かってくる。

信じなければ、越えられない壁もあるから、自分は信じたい。

レベル∞の真の力も。人の思いも。

一回戦（後書き）

あとがきなんか書くもんか。書きたい奴だけ書けばいいんだ。あ
とがきなんて絶対書くものか！。

一回戦 その？（前書き）

ハチは、この世界中の誰よりも強い、格闘シミュレーションゲームマ―。

一回戦 その？

彼の名前は、ハチ。通り名は、レベル∞。そんな彼は、エイリアン退治に強制的に参加させられることになり、いささか動揺していた。それでも、これからたくさんゲームができるということで、落ち込むことをする必要は無かった。

「シチ、どう思う？ さっきの黒服の男。可笑しいだろ、自分で自分で退治をしないんだ？」

「えっ、それは簡単だよ。あの人だけじゃ追いつかないのさ。それくらい、鏡面世界のエイリアンは増殖している。単純な話だよ」

「ふーん」

ハチはコントローラーで持ってイメージした。この組織には不明な点が多い。

主催者は誰か？

鏡面世界の退治を何故するか？

ここは一体世界中の何処に位置しているか？

何もかもが、分からないままここにいます。

このままじゃいけない。

ハチは、そう考え、この白いゲーム部屋から外に出ることにした。しばらく、廊下を歩いていくと、食堂、カラオケ屋、床屋、などと様々な施設が完備されていた。しかし、どうだろう。人が全く居ない。

気がつけば、彼は道に迷っていた。

そんな時、たまたま鏡を見つけた。

それをつつかり見たことが、駄目だった。

思ったとおり、怪物達が、こつちを見ている。何か、とんでもない世界に彼は迷い込んでいるということに気づいた。

しかし、帰り道を探らなくては...と思っていると後ろに黒服の男が居た。

振り返る、ハチ。

その男は、厳格な態度を持って、ハチを殴って気絶させた。そのため、ハチは意識を失い、気づけばコントローラーと画面しかない密室にいたのである。

いろいろ気にはなつたが、ゲームをしろ！　ということだろう。一つモニターには、僕が推したボタンが表示される。もう一つは、通常の戦闘画面だ。

しばらく、それをいじっていると、奴隷から通信が来た。

『すみません、プレイヤーさん。あなたは凄いですって？』

「はい、そうです。お任せください。この世界で一番強いゲーマーです。いずれ、佐々木龍之介を越えるでしょう。それより、あなたの名前は？」

『えっ？　どうして？』

「僕は、奴隷なんて呼び方は嫌です。それが信頼となります。絆です。教えてください」

『荻谷です』

名前を、聞くと、僕はさっきまで構築した作戦の全貌を様々な面から指示した。

その通りにやってくれば、あとは大丈夫なはずだ。

しかし、荻谷はきつとゲーム初心者。細かな技の出し方の説明も必要だろう。

「Aと↓が、必殺技です…」

続ける。

「Bが、ミドルキックです。Bと→が…」

しばらく、話し込む。

そして、ちょうど終わった頃に、鐘が鳴った。

その時、目の前に超鏡面空間が生まれ、エイリアンの姿が見えた。その姿はおぞましく、見ているだけで吐き気がする。

「ワガハイニハカテン、ギガガガガガ」

液体が垂れている、そして目が緑色。

ハチは、それでも全く動じなかった。

「はつきり言う」

ハチは、皮肉をこめて言った。

「バイオハザードのほうが怖いね。また、そう考えれば世の中に怖いものは無いんだぜ」

高らかに笑う、レベル[∞]。

その目は、エイリアンよりも鋭く、真紅として、真っ直ぐなのだった。

それでも、エイリアンは、自己紹介した。

「ギガンテス、トイマス。ギガガガガガ」

その不気味な自己紹介は、常人に最大の恐怖を与えた。

『怖い』と奴隷である荻谷は言った。

「荻谷さん。落ち着いてください。僕がいる限り、彼は豆粒同然です」

とりあえず、勝つか…。

ハチは、冷静に、エイリアン【ギガンテス】のステータスを考慮していく。

再び、鐘が鳴る。

深遠な、響く音。

ハチは、さっそくプレイボタンを押した。

このゲームは、『N2W』という随分昔の格闘ゲームで、特殊能力で戦うゲームだ。それ以外は、他と変わらない。キャラは、割と美男子が多い。

彼は、美男子【WAR】を選んだ。

敵は、超美男子【NOT】を選ぶ。

すると、一気に戦闘は展開した。

彼の指示通り、荻谷は戦況を打破していった。

しかし、ギガンテスはあっさり、その戦術を看破し始めた。

対戦を見ている限り、このギガンテスと言う奴は、操作に美学が溢れんばかりだ。さすが、知的戦闘種族だ。今までのやり方では、

もう…。

「ありえない。だが、これは実践で全く無いわけではなかった。まさかここまでとは…」

そのエイリアンが、異常な進化能力を持っていることに、啞然とした。

その時、一番怯えていたのは、荻谷だった。

レベル∞を信じる気持ちと、敵の強さがぶつかり合う。

しかし、一気にライフポイントが、同等に。

これでは、押され負ける。

そんなとき、レベル∞の力が覚醒した。

無限の戦闘パターンの中から、すべての情報を統合していく。

何もかもが、統合され、いずれ一つになる。

その時、すべての、闇は晴れた。

ハチの目が、七色に輝く。

ハチは、通信ボタンで静かに伝えた。

「○○○○してください」

その後、一気に勝利した。

ギガンテスは、もう手を出せない。

完全に、攻略した。

その後、荻谷サンと対面した。

「なんで、あんな策を？」

「簡単ですよ。相手が、勝とうとしていたから」

Q、問題です何を指示したでしょう。

A、このゲームの地形を利用して欲しい。この地形は、段差が多い。そこで待ち構えていることこそ、勝とうとしている相手を一回だけ打破する方法。それくらい、エイリアンも勝てると思い込んでいた。イレギュラーが、このゲームを制した。

しばらくして、賞金が与えられた。エイリアンは秘密裏に死刑になったそう。どの道、奴は敗北したせいで、仲間に喰われるのだから、可愛そうでも在る。

それにしても、ゲームって最高。

指示を与え、疲れ、ベッドに横たわる。

上を向いて、ハチは呟いた。

「何してんだろ、僕。こんなに充実感があるのに……。何かが足りない」

その瞬間、横に一人の男が居るのに気づいた。

「ワッハッハ。君は、根暗だな」

黒服の男、偽エイリアンが居た。

「あんたねー」彼は冷静に突っ込んだ。

「このゲームは、単なる遊びじゃないんだ。それを教えたくてな」

「は？」

「よく聞け若造」ハチは、ビクツとした。「この世界で一番だとしても、誰の役にも立たなかったら、それは一番じゃない。たとえば、この世界で一番駄目だとしても、誰かの役に立っていたら、それは一番だ。それと同様、これはゲームだ。それも、お前が人として変わるためのな。それを教えておきたかった。恐らく、その素質はお前には無い。だから、俺たちが全力でサポートする」

「どうして……？」

「勝つんだよ、ハチ。奴らに、エイリアンに」

「？」

「そのうちに答えが見つかる。シンプルな話さ」

ハチは、少し、考えてそれが真実だと思った。誰かの役に立つことが、この世界にいる根本の理由だ。害の在るものは、存在を許されない。

月明かりが、部屋を照らす。

そんな中ふと思うのだった。

自分は、今までゲーム以外のものに関心が無く。周りのことなんて考えなかったことを。

何かが、分かりそうに分らない、そんな月夜の出来事だった。爽やかに、笑う八チ。

「嗚呼、人に頼られたの初めてかも知れないな」

…。

…。

続く。

一回戦 その？（後書き）

あとがきが、死んだ？ 本当か。あとに書くと言っておいて、前に書いたって、本当か？ あとがきは書かなければ、あとがきは残さなければ、ただの無言。

僕は、出て行くよ。このあとがきからも。もう、あとがきなんか書くものか。

二回戦（前書き）

格闘ゲーム第二幕。暗き夜の謎の施設は今日も活動中。

二回戦

組織について、偽エイリアンは、こんなことをまた教えてくれた。
「知的戦闘種族エイリアンを、倒すことが目的のようで、実は別に目的があるのさ」

「何だよそれ？」

「資源」金だよ。知的戦闘種族のエイリアンは、この世のものじゃない資源をたくさん持っている。それを勝って奪いたいんだ。それに、彼らの存在自体にも組織が絡んでいる。今の君に話せるのはコレくらいだ。ハッハッハ愚か者達」

凄く…、ムカツク。

「お前も…、ちゃんと考えろよ」しかし、偽エイリアンの最後のそのセリフが、とても、重かった。

いろいろ、推測はしたが…まあ今考えても仕方ないことだ、とハチはすぐ諦めた。

翌日、ハチは朝食を取るため、完備されている売店へと足を運んだ。

ハチは、夢うつつのまま、あくびをした。そして、しばらく店内を散策し、サンドイッチとジュースを手に取り、レジへ。

その後、ハチは、サンドイッチをほうばりつつ、廊下を歩く。

その頃には、意識もはつきりしてきた。

ようやく、ゲームの在る部屋へ到着すると。

みんな、さっそく格闘ゲームで遊びまくっていた。

画面が一台しかないのだが、画面が六分の一に分割され、多くの人が遊んでいた。

ハチは、いくつかある、ベンチに座り、その試合を観戦した。それにしても、どれもこれもレベルが高い。

皆、コンピューターの戦術をはるかに越えている。そんなことを

思いつつ、ジュースを飲んでいると、ある人間が話しかけてきた。

「あのさ。一回勝負しない？」

その男は、真っ直ぐな金髪の白い服を着た、黒いオーラを感じる男だった。

「僕は、ハチ。君の名前は？」

「ボクは、プロフェッショナルワンの、イチだ。どーも」

…、プロフェッショナルワンって、いつもネットで自分と互角にやりあったあいつか？

ハチは、歴然と動揺する。

まあ、コイツが、本当にプロフェッショナルワンか試す意味でも、勝負したほうがいいか。

「裏ネット社会じゃ、僕と互角だったよね？」

「はつきりいつて、アレは本気じゃない」

…、何？

「人生は、格闘ゲームに似ている。倒すか、倒さないか。たとえ、どんな敵でも、技を生かせれば勝てる。そんな風に考えていくと、恐れるものなんて何も無い。それが、いかに強い相手でも」

ハチは、この瞬間思った。こいつとの戦いも、倒すか、倒さないかだと。

「じゃあさ、僕が君を倒すよ。レベル∞の真の本気で」

ハチは、能力がありいかなる場合もあらゆる方向で格闘をシュミレートすることが可能だ。しかし、今日の前に居る敵はそれを越えている。

その事実には、ハチは怖がらず、むしろ面白いと思った。

「面白いね、本当」

ハチは、コントローラを掲げて言う。

「すべては勝つか、負けるか。そして、レベル∞の進化は止まらない」

しばらくして、空気が変わる。

お互い、ゲームをセットし、コントローラーを握った。

そう、ハチはすでにこのゲームの勝敗を見ていた。
ギャラリーは、この寮の全員にまでなっていた。

今回、使うゲームは、『グロス・コーティングM』。2024年
四月、このゲームは圧倒的技の量であらゆるゲーマー達を混乱に落
とし入れた。上級者達を除いて。

しかし、このゲーム単に技が多いだけで、お気に入りの技をよく
理解しておくことが大切なのである。そんな風に、このゲームは次
第に皆に受け入れられていった。

また、キャラの特徴は、騎士であること。騎士はたくさんの武器
を装備しているので、ビジュアルがカッコイイ。子供は、それが目
当てで買っていたそう。

ハチは、龍騎士を選択。

イチは、緑戦士騎士を選択。
ゲームスタート。

白熱する、バトル。

ハチは、さつそくアームブレードで攻める。

イチは、すかさずガード。

しかし、ハチはガードをすることを読んでいたので、ガードが切
れたタイミングで、上にふつとばす、攻撃。

イチは、先手を取られた。

ところが、イチはこれが狙いだった、上から下の攻撃は、重力も
ありダメージが高い。

よって、剣で下を斬る。

ハチに、大ダメージ。

ライフは、ハチ20/イチ28。

「まだだ」レベル∞は、集中する。「見えた」

ハチは、遠距離にまで攻撃が届く弓矢を使った。

これは、なんとかヒット。

イチ19。

×××した、大ダメージ。

イチ10。

×××した。イチのキャラが吹っ飛ぶ。

イチ5。

イチ0。

GAME SET。

Q、×××は何？

A、×××「連続攻撃 あるとき、イチのキャラの動きは弓矢によつて封じられていた。そこで一気に決める算段を立てたということなのだ！

「勝ったぜ、シチ」とハチは、喜びをシチに告げる。

「なかなか、だな。でも、次は無いと思うぜ。こいつも相当な奴だ」シチは、ハチと軽く手をタッチした。神妙な空気が流れる、そこには敗者と勝者の関係が浮き彫りだった。

「くそう」イチは、ひがむように落ち込んだ。「さすがだ…、お前は自分のキャラを熟知している。負けだ」弱弱い声。

「そう負けたんだよ、でもいいんだ」ハチはしゃがんで言った。「確かに倒す、倒さないもある。だけど、きつとこれはもつと強くなれつてことなんだ。もつと強くなれつて教えてくれている。そう思えば、何も辛くは無いさ」

そこには、戦ったもの同士が友情が存在していたのだった。

シチは、その時冷静に勝負を見ていた。

それでもイチに勝ったハチの凄さに圧倒された。

…。

食事、明日の戦闘の準備後… 8時5分。

「格闘ゲームつて、きつと闘うためじゃないんだね。通じ合うためなんだな」。教えられたよ」

シチは、そんな風に思ったことをハチに言った。

実は、ハチとシチの寮部屋は一緒なのだ。

窓の外から月明かりがさし込む。

「まあね。大切なことを表しているんだよな、本当にどうしても闘わなくちゃいけないときがきたら、通じ合うことからはじめたいものさ」

そして、このエイリアンとの戦争も、通じ合うためにできたら、それが一番いいことだ。

ハチは、おもむろに、窓の外からかすかに見える、星空を見上げてみるのだった。

現状…全ては夜の闇に包まれている。

それでも、星達は輝く。時間は流れていく。

…。

…。

…。

…。

END—

二回戦（後書き）

いつも、後書きに文句は言えないので、一言。
ぜひ、楽しんで行ってください。それが、一番嬉しいです。

番外編 シークレットゲーム 未来へ続く格闘SLG（前書き）

未来に行きたい人は、この指止まれ。

番外編 シークレットゲーム 未来へ続く格闘SLG

物語は、エイリアンの存在によって生まれた。エイリアンは、極度に格闘を好む。格闘の中でも、ゲームの格闘だ。彼らは、幻想の鏡面世界の住人であり、不明なのが。何故そこに彼らは居るのか。再び疑問が、彼の頭の中でよぎる。

答えはまだ出ない。しかし、どう辿ったところで、今は真実なんて無いことを、彼は知っている。その証明は、いずれされることだろう。それが、未来へと繋がる。

格闘シュミレーションゲームを、楽しげにしている人の群れ。それが、今日も存在していた。

その中で、ひとときわ輝くのが、ハチだ。

彼はあらゆる格闘戦をこなし、ついに格闘シュミレーションゲームの天才となった。

「にひひひひ、余裕だねえ」

周りが、凄くその言葉に動揺した。

多くの人間のゲーム域とはるかにかけ離れているのだ。残りのライフポイントが1の状態でも、彼は必ず勝つだろう。

この間の戦闘以来、レベル∞ははるかな領域にまで到達していた。それは、もはや、お釈迦様。

彼の手のひらで、全ての人間は踊らされる。

その時、ゲームがショートした。

「あっ」

ガーン、と言う顔をするハチ。

その時、後ろには、黒服の男が居た。通称、偽エイリアンの愛称

で知られている。

「君たちは、バカかね」いきなり、重い口調で話し出す。「エイリアンを倒すことが我々の目的だ。ところが、君たちはゲームに夢中。それではいけない。全く意味が無い」

「じゃあどうしろっていうんだ！」メンバーAが言った。

「いい質問だ」そう言って、少し笑う。「君たちには、タイムマシンに乗り、未来に行き究極のゲーム『Wの真実』を得てきてもらう。それが今回のミッションだ」

「時空を越えろって言うのか」メンバーBが言った。

「簡単だよ。やはり、君たちはバカだ。大バカだ」

その時、ハチは考えていた。タイムマシンは、そう簡単には作れないはずだ。もし作れているというなら、それが未来から来ているという場合だけだ。

恐らく、この組織は以前から超常現象について、何らかの根拠を持って説明をしてきた。その結果が、エイリアンの存在、タイムマシンの実在、鏡面世界の呪縛に繋がっている。すでにハチは、その可能性を見抜いていた。

「付いて来なさい」黒服の男はそう言った。

しばらく、廊下を歩くことになったが、装飾も何も特徴がないのが特徴の廊下だとしみじみ思った。

それよりも、長い距離を歩くのが、非常に怖かった。

徐々に、緊張感が高まっていくような。

「なあ、シチ」ハチは、会話を求める。「タイムマシンってなんで、

必要だと思う。単純に完全なゲームが欲しいだけか？」

「んー、それは愚問だね。真実は、一つ。欲しいだけじゃなく、僕たちの成長に必要な不可欠なゲームなんだよ。きっと、未来でも希少価値の高いゲームだと思うよ」

「で？」

「そこに、僕たちが必要だということは、資格が必要なのさ。それを得るための何らかの資格が。強さだけじゃない、素質も資格の一つだ」

「ふーん。シチがそう思うなら、そうかもね。でもさ、きっと何か組織がたくらんでいる気がするんだよな。第一、俺たちじゃなくても、格闘ゲームの指示くらいあの男（偽エイリアン）なら可能だろ。その辺どうしても疑問感じる」

「へー、さすがハチは考えることが違うなー。そこにつなげてくるのか」

「まーな」

そんな感じで、歩いていくと、だんだん寒くなってきた。気づけば、ドアを潜って倉庫のようなところへ。

そこには、ゲームコントローラーで操縦する巨大な卵形のタイムマシンがあった。

「時空を越えるときに注意して欲しい。あまり騒いだり動いたりするな。タイムマシンが壊れやすくなる。ほとんど壊れないと思うが、気をつける。お前達のような度胸しかない奴らに言う。未来に行ったら、必ず『エンマ』に会え。以上」

エンマ、閻魔大王？ そんな奴に会ってどうしろっていうんだ。でも、相当なオーラを感じる。ハチは、おもむろにアゴに手を当てる。

エンマ。

閻魔大王。

ゲーム。

ボスキャラ？

未来で何かが起こるのか。その時に、出てくる。
どうだろう。

遅れながらも急いで、マシンに乗り込む。

その時、一瞬愛用のコントローラーを落としそうになったが、何とか無事だった。

ゲームコントローラーで外部から設定を開始する、黒の男。

…タイムマシンは動いた。

一瞬だった。気がつけば、未来。何も無い闇と、荒野の世界があった。

もはや、人が住める場所など無い。殺伐としている。土壌も完全に汚れきっている。こんなところじゃ、まず作物は育たない。そして、この冷え切った空気では、もうまともに活動できる生物は居ないだろう。

そう、そこは、まさに地獄。

そして、閻魔の意味がようやく分かる。

「生き残りが、閻魔か」

「生き残り？」

「ホントかよ」

「でも、こんなところで生きれるか？」

「まだ酸素はあるだろ」

「そうだけどなー」

「それより、何があつたんだろう」

一同が、会話をし始める。

そんな中、ハチは閻魔の本当の意味に気づき始めていた。

「おい、シチ。俺たちだけ別行動だ。閻魔の意味が分かった」

「エンマの意味？ 本当か」

シチとひっそりと話をする、ハチの目の前には、あいつが居た。

「イチですが」

「うわわわあああ」驚く、ハチ。「何のようだよ」と、切りかえして突っ込む。

「いやー、僕としても。人間の居ない世界で一人残されるのは困るもので」

「あのさ…、お前に質問するけど、エンマの意味は分かるかい？」

ハチは自信満々に、イチに皮肉を言う。

「もちろん」

「は？」

「人間がいない世界で、法になるのは人間以外。そして、さっきからそこにあると思っていた、山の辺り、妙なでこぼこがある。そこに、『閻魔』がいる。地獄の裁判官。ホンモノの閻魔大王がね」

ニヤリと笑う、イチ。

その解答は、まさにハチ自身の答えと同じものだった。

…。

いずれ、閻魔の本当の怖さが分かる。

殺戮と、残虐。

閻魔は、人間の怒りの塊だった。

それはエイリアンに食い尽くされた、人類その物の。

そして、彼らは思い知る。

エイリアンの存在の悪に。

そして、閻魔大王の正体のおぞましさに…。

「僕の勘じゃ。閻魔大王は、人類が進化を遂げた別の姿だ」

そう、ハチは言った。

…。

…。

番外編 シークレットゲーム 未来へ続く格闘SLG（後書き）

結局のところ、人類は皆死ぬ。その事実の上で成り立つのが、人間の更なる進化の期待だ。しかし、そんなものはよほどの衝撃が一口气に来ないと成り立たない。それについて考えてできるのは、今を必死に生きることだけだ。

番外編 続（前書き）

物語は、未来の世界へ。

番外編 続

閻魔大王のところまで何とかたどり着いた。

お城のようなところが、その根城で、五階建ての一番上に彼は居た。

「ハア、ハア。疲れた」

ハチは、体力はあるほうだが、少しばかり未来の空気が薄いのが起因してだるい。

シチは、余裕そうにしている。

イチは、まだ遅れてきていない。

「ゲーム…、くれ」

閻魔大王は、にやりと笑った。

すると、こういった。

「私のクイズに正解したら、お前たちが欲しいゲームを一つずつ渡そう。実は、お前たちが来ることは随分前から知っていた。過去が大変なのだな」

「ああ、そうだけど。クイズを先にしようぜ」

イチがようやく到着。倒れこむ。

「Q、相手の強さが自分と同じでした。どう戦う？」

この問題の難易度に、ハチは度肝を抜かされた。

普通のコンピューターゲームでもトップクラスの相当難しい敵もいる。

この問題は、すべての真理。

それを、閻魔大王は求めている。

「安心しろ、シチ。俺に任せておけ」

目をつぶって、ハチはコントローラーを持つ。

そして、計算する。

すべてのパターンを。

「見えた」

「答えるが良い、ハチ」

「A、単純に自分のやり方を詰む。そう、自分を越えるんだ。どんな敵でも自分を越えればいい。必ず勝てる」

「ふはははははは。さすがだな。さすが、格闘ゲーマーハチ。真実を求めることに成功した君には、褒美を与える」

俺たちは、三本のゲームソフトを選び取った。

「それらは、未来でもっとも優秀とされた究極のゲームたち。お前達にこそふさわしいだろう」

俺たち三人は、究極のゲームソフトを、空に掲げた。

その後、何故か閻魔大王の持っていた転送装置でタイムマシンに飛ばされた。

そして、俺たちは無事に、現代に帰った。

この日の経験と、得たものが、これから役に立つのだ。

俺たちは、新しいゲームを手に入れ、新しい体験をする。

新たな始まりだ。

…。

…。

結局、俺たちはまだまだ戦わなくちゃいけないんだ。恐るべし、鏡面のエイリアンと。

そういえば、閻魔大王はこう言っていた。

「自分は、世界的なゲーマーの子孫だ」と。

それは、誰なのだろう……。

果てない、世界が未来だ。しかし、いつかは終わるのだ。

番外編 続（後書き）

いつも、読んでくれてありがとうございます。心の底からそう思うばかりです。ぜひ、格闘ゲームをした気分になってください。

二回戦続 必勝、究極奥義（前書き）

少しばかり、未来に行ってしまったが、二回戦再開。

二回戦続 必勝、究極奥義

ハチ、通称レベル∞は暇つぶしに施設内を歩いていると、屋上へ通じる階段を見つけた。

そこには、全く予想しない光景があった。

今まで全く見たことのない、都会が広がっていた。「ここは一体」驚きながらも、ハチはそこで昼寝をすることにした。

とりあえず、タイムマシンが出てきた時点で、この世界の設定はでたらめだ。そう考え、のんきに空を見上げる。

どうやら、空は何も変わっていない。

どこまで、この世界はハチを混乱させるのだろう。

普通の生活を、彼は大切にしていて。

ここで、少しハチは過去を思い出した。

彼には、五歳くらいの頃好きな女の子がいた。

きっと、彼は優しさに惹かれたのだろう。ドキドキしながら、その子と一緒に少しの時間を過ごした。

でも、十年後、彼はようやく告白した。

しかし…、その頃にはすでにその子も別の男の子が好きになっていた。

これほど、悲しいことがあるだろうか。

彼は、それから三日間泣き続けた。

自分のふがいなさ、魅力の無さ、無力さ。

もう……死んでもいい気がした。

そんな時、彼は格闘ゲームに出会った。昔から柔道部に入っていたので、のみ込みは早く順調に実力を伸ばしたのだ。

それから、裏ネット社会に入り、そこで最強の存在となった。

今思えば、フラれたことが力になったのだと気づく。

ハチは、そんな昔話を連想しながらゆったりと、時間を過ごした。
「ふああああ、眠い。過去があるから、今が在る。でも……僕は……
大切な人を失って辛い。その気持ちだけは、割り切れない」
そんなことを、言っていると、後ろから「よお」とイチが話しかけてきた。

「貴様、どうしてここに！」

「ふっ」キザに髪をなでるイチ。「そんなことは簡単さ。俺もこの常連だからさ」

「なーんだ。それだけか。ストーカーかと思っただよ」

「ぐっ、なんてことを言う」

しばらく、無言の時間。

二人は、座り込んで話し始めた。

「実は、だ。さっき佐々木師匠が言っていたのだが、そろそろエイリアンを倒さないと繁殖活動になって状況が悪化するそうさ。だから、今日指示格闘ゲームをするらしいぞ」

説明しよう、『指示格闘ゲーム』とは、プレイヤーをするのではなく別の人間にプレイをさせて、自分の敗北を避けるゲームである。このシステムは、負けると奴隷が死ぬという状況下なので、プレイヤーには負担がかからないが、ペナルティーを負うため、真剣勝負だ。

奴隷に指示をするということは、他人と信頼関係を結ぶことであり、これをするプレイヤーを、プレイヤーではなく、マスターと主と呼ぶ。

マスターがいるため、真実は常に闇の中に存在する。

そう、このゲームは在る意味有利だ。戦いの中、冷静になって考

察できるのだから。

立ち上がって、ハチは屋上から去ろうとする。

その時、イチは言った。

「お前、勝つ自信あるのか？ 今回のゲームは最強の知的戦闘種族『タドー』だぜ」

「うーん、……もし負けても、俺は絶対に負けない。断言しよう。負けても、負けない。負けなくても、負けない」

早期ながら、勝利への一方通行を宣言する。

何故ならハチ、レベル∞は、……すでに究極のゲームの一つ『クロスサクリファイス』をプレイしていた。

このゲームは、一度でも攻撃を受けたら死ぬという設定。

これは、すでに神器が必要だろう。

それを理解した上で、レベル∞の実力は、最終段階へ。

お察しの通り。

究極奥義『ムーン・テレポート』を得ていた。

それは……まさに敵を瞬殺しうる、アルティメット。

彼と、彼の仲間は、七時ちょうどに、不思議な機械のある部屋につれられ、ジェット機のcockpitのような場所に座った。そしてそこが、繭のように包み込まれた。

その後、様々な機器を見て、この間の秘密裏につれられた場所と同じだと気づいた。

このcockpitのキー配置も同じだし、画面も同じだ。

「そうか、一回きたことあるんだ」

しばらくして、奴隷の一人が画面に表示された。奴隷はこの間とは違う。

「あの、名前を聴いてもいいですか？ ここは信賴しましょう」

マイクに向かって言う。

すると、稲生という名前らしい。

『あの、どうプレイすればいいですか？』

「えーっと、実戦経験は？」

『在ります』

「では、○○をされたら、○○。また、××をされるケースの場合は……ということだ」

そんな話が延々と続く。

やはり、ブザーが鳴った。

「ありがとうございます。理解していただけたようですね」

『まあ……』

そのブザーの音と同時に、エイリアンの画面が写った。

鏡面世界との交信だ。

「よろしくな、エイリアン。絶対負けないぜ」

「ワレワレニハカテナイカンナ。ワタシハ、『ギーロ』。セイゼイ

ユメヲミルコトダ。イツテオク、ワタシノチカラハホカノレンチュ

ウトチガウ、ダカラオマエハマケル」

「ふっ、はははは。威勢がいい奴だな」

「グググググア、グアアア」

エイリアンの醜い部分が、画面に映りまくる。

つたく、寄生虫みたいな映像をこんなところで見ると葉目になるとは。

ホラー映画並みだ。

「じゃあ、はじめよう」

ゲーム名は、『サロンサロン』石神団という優秀なクリエイター
ちーむが作った。2027年の傑作。特徴は、神々の名前が戦士の
名前にされているということ。裏面には、仏陀系のキャラも戦士の
名前にされる。

一応、最強クラスの敵も出てくるので、難易度が高い。だが、ハ
チにとっては埃や虫けら同然だったそうだ。

「ふあああ。昼寝の眠気が残っているよ」

ハチは、キャラ【無限戦闘糞迦】を選択。

ギーロは、キャラ【夢の水のミハエル】を選択。

互いのキャラは、互角の強さだ。

たいした、問題は無い。

しいて言えば、連続攻撃はこちらが得意だが、技の多さではミハ
エルが上。

例の戦略により、勝負は流されていき、勝つかに見えた、最後の
攻撃でカウンターをされ。

こちらのライフ2 / 相手ライフ3と危機的状況に。
相互に一回の攻撃で、負けてしまう。

「A+→+↓。その後攻撃です。稲生さん！」

マイクに向かって、全力で指示をする。

その通りに、プレイして、稲生さんは勝負を決めた。

【糞迦落とし】。

これは、今のボタン選択によって発動するものだ。

そして、ムーン・テレポートでも在る。

三日月のように動き、テレポートしたように速く攻める。

【勝利終了】

その後、ハチは高らかに言う。

「ムーン・テレポート・ヴィクトリーーーーーー」

「ーーーーー」

シチも、イチもよくやつたと褒めてくれた。

二人とも、余裕で勝つたらしい。

ハチも本気を出せばこんなもんじゃないが、奴隷を操る難しさもあつて、ダメージは食らう。

しかし、明らかにハチペースであつた。

「フフフ、ははは」

笑いまくる、ハチ。

しかし、ふと思つてしまう。

どうして、僕はこんなところにいるんだろう？

もつと他のところにいるべきではないのだろうか？ と。

エイリアンを倒して、倒し続けて、その先に何が在る？

「…はは、人は一人では生きていけないんだ。だから、協力する。でも……協力したつて、一人の奴はいるんだよ……」

屋上で、泣き叫ぶ、ハチ。

昔の記憶が、彼を苦しめ。

新しい環境になれてなくて。

それでも、やらなきゃいけない現実があつて。

そんなもの捨ててしまいたいのに。

捨てられなくて。

悲しくて、辛くて。

誰にも相談できなくて。

もう……、終わりにしたいくらいの気持ちで……。

……。

どこまでも続く空の果てに、希望の三文字は存在するのだろうか。

二回戦続 必勝、究極奥義（後書き）

さすがに、後書きを書くのが面倒になってきたので、俺も宣言する。

ヴィクトリー……！ ってなんかどこかで聞いたような。さあ、君もコントローラーを握って、レッツゲーム。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3639z/>

V S ・ G A M E 『バーサスゲーム』

2011年12月22日13時50分発行